ワークショップレジュメ（担当：阿尾）

　オナニスムという問題は現代においてはもはや陳腐で些細な問題にも思える。ただそれが重大に思えていた時期は現代から思ったほど遠くはない。たとえば、マリーアントワネット裁判において、かつての王妃を断罪するために、その話題がスキャンダル的な切り札として使われようとしたこともある。オナニスムをめぐって、その抑圧と解放の歴史をたどることは決して些末なことではないし、近代および現代の歴史において重要なテーマともなる。実際そうした主題をめぐって書かれた数々の著作をあげることも難しいことではない。ただここではそうした解放の物語とは別の選択をしたいと思う。

　１８世紀におきた運動について語りたい。ティソの書いた『オナニスム』という著作は当時の医学書としては大きな反響を引き起こし、反オナニスム運動において大きな役割を果たしたと言われる。しかし、それだけの影響をおよぼした書物が、そして１９世紀においても少なからぬ影響を与えた書物が現在においては、一部の専門家をのぞいては、ほとんど忘れ去られているという事実をどのようにとらえたらよいのだろうか。栄光と忘却に彩られたこの本から、さらにそこから影響を受けて書かれた『インフォマニア』という著作から考えてみたい。

　ただ忘却といっても完全なものではない。貴重な例外がミシェル・フーコーである。彼は講義録『異常者たち』において、ティソおよび１８世紀にあらわれた反オナニスム・キャンペーンに注目している。彼はなぜこの時代に性的活動一般ではなく、オナニスムを主たる対象とした運動が現れたのか、そしてまたそうした動きは対象を大人たちの性的な身体にではなく、なぜ子供や青少年たちの身体に向かったのかを問題とする。そこからフーコーは子供たちの身体に注目し、それを管理コントロールしようとする家庭と医学の場に現れてくる権力を考え、その権力過程を１８世紀から追跡していこうとする。

　こうして、フーコーは現代の権力メカニズムに至る動きを１８世紀にはじまるこのキャンペーンの中に見ようとしている。ここではそうした現代にまでいたるフーコーの射程を確認しながら、もう一度１８世紀に戻りたい。フーコーがまとめかけた図式を、１９世紀、２０世紀まで至ろうとする道程を見ながら、
１８世紀において、その問題のテキストを深く読み込んでみたい。水平に展開していくベクトルをいわば垂直に向きをかえて、多層的な分析を展開してみたい。

　『オナニスム』はいかに書かれているのか？いかなる形式、イメージを持っているのか？そこには錯綜した動きを見ることができる。今日の我々が想像するような医学書の体裁はそこにはない。まず書くことへの屈折がある。性的な主題について書くことで、性的な欲望を喚起することを恐れ、それに対抗する論理構成が序文には見られる。さらに病気の害毒を説明して、防止につとめるといっても、その書き方はむしろ恐怖小説の描写を思わせる。病気の恐怖を描き出すことで、その惨状から若者たちを救い出そうというのである。ただそれは悪書の読書により悪の道に入るという読書の弊害のメカニズムをそのまま逆転

して機能させているようにも見える。また手紙を利用することで、恐怖の体験を読者に共有させようとする仕組みも医学書らしからぬ観がある。それは 19 世紀のより客観的な記述と比べれば、一目瞭然である。

ここにおいて、18 世紀における感受性のメカニズムの一般的な展開をみることができるのではないだろうか。18 世紀は啓蒙の時代、官能の時代、感情の時代などと多様に形容することができるが、その一方で恐怖の時代でもあった。権力の最上位に位置する王にたいしてもダミヤンの刃は向けられるし、またパリの民衆の間では官吏による児童誘拐、監禁などの疑惑が共有されていた。人々は時代の中で、不安定さの中に生きるよりは、実体化された恐怖の対象を求めていた。オナニスムのそうした傾向の中で求められ、主題化されていったように思える。そこでは、その実体化にあたって、物語世界などで効果をあげた語りが動員されていったと思われる。